

赤十字NEWS

May 2014 Vol.888
<http://www.jrc.or.jp>



日本赤十字社

赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

CONTENTS

TOPICS 2

- 三陸鉄道全線運行再開
藤原紀香さんが
住民とともに祝う
- 赤十字の源流さぐる
「赤十字への道」
常任理事会開催報告

TOPICS 3

- 上智大学と
ボランティア共同宣言
- 昭憲皇太后基金
第93回支援事業決定
国際シンポジウムで評価
児童福祉週間

SPECIAL 4 5

- 赤十字運動月間
あなたも
赤十字サポーターに!

AREA NEWS 6 7

- 東京・大分・徳島・長野・静岡
秋田・岩手・茨城・兵庫・佐賀
- 日赤看護大など5大学院
共同教育課程を開講
Voice&プレゼント

WORLD 8

- ウガンダ
保健ボランティアの活躍
- フィリピン
日赤が復興支援計画策定
- IPCC総会
気候変動の人的影響



<http://www.jrc-akb48.jp/>



<http://www.jrc-undougekan.jp>

「愛の力を
信じている。」

赤十字運動月間スタート EXILE ATSUSHIさんも協力

毎年5月は「赤十字運動月間」。国内外で人道支援活動を行う日本赤十字社を支える「赤十字社員」への参加を広く呼びかけます。

今年の運動月間CMは、ダンス&ヴォーカルユニットEXILEのATSUSHIさんとタイアップ。世界の平和を願ってATSUSHIさんが書き下ろした新曲「Angel Heart」に乗せて、災害救護に取り組む日赤職員の姿が描かれています。ATSUSHIさん自身も出演するCMは、日本赤十字社公式 YouTube でご覧いただけます。

CMは日本赤十字社公式 YouTube (<https://www.youtube.com/user/JapaneseRedCrossPR>) で15秒バージョンと30秒バージョンを公開中

今月の出会い



三陸鉄道 社長
望月 正彦さん

社員一丸となって全線開通

「鉄道は地域になくてはならない存在。鉄道がなくなって栄えた町はありません」。東日本大震災から3年ぶりに全線開通を果たした三陸鉄道。あの日、津波によって駅舎や高架橋、線路など計317カ所が被害を受け、107.6キロ全線が不通に。

震災直後、線路上の雪に多くの足跡が残っていました。「線路が唯一の道となった地域がたくさんあったのです。その時、皆さんのためにできることを精一杯がんばろうと決めました」。震災から5日後、被害が軽微だった北リアス線の一部で運行を再開。被災地の足となり、無料で乗客を運びました。「降りる時に住民の皆さんが必ず『ありがとう』と言ってくださいました。それを聞いて社員

全員が『動かしてよかった』『地域のために役立った』と思い、一丸となって全線運行再開を目指すことができました」

沿線は復旧が遅れ、まだ周辺に民家がない駅も。「地域の足と観光、特に震災学習列車に力を入れます」。社員の奮闘と国内外からの支援でつながれたレールは復興への夢と希望を乗せていきます。

PROFILE

昭和27年1月生まれ、62歳。岩手県花巻市出身。岩手県庁入庁後、盛岡地方振興局長などを歴任。平成22年6月、三陸鉄道社長就任。三陸鉄道は県や沿線市町村が出資する全国初の第三セクター鉄道として昭和59年4月に開業。今年が開業30周年。「三鉄」の愛称で呼ばれ、昨年放送されたNHKの連続テレビ小説「あまちゃん」のモデルになり、一躍有名に。

岩手・三陸鉄道全線運行再開

赤十字広報特使・藤原紀香さんが 沿線住民とともに祝う

運行再開に当たっては、クウェート政府から日本赤十字社を通じて寄せられた原油の代金相当額約400億円の一部が、8両の新車両や駅舎整

東日本震災で被災した三陸鉄道の南リアス線(盛-釜石間、36・6キロ)と北リアス線(宮古-久慈間、71キロ)が4月5、6日、震災以来3年ぶりに全線で運行を再開。赤十字広報特使8年目を迎える女優・藤原紀香さんが全線運行再開記念式典に出席するとともに、記念列車に乗って沿線住民の皆さんの声援にこたえながら、ともに再開を祝いました。

旗やクウェート国旗の小旗を振って出迎え。中には電車を追いかけて走る子どもたちの姿や橋の上で一列に並び飛び上がって喜ぶ人々も。

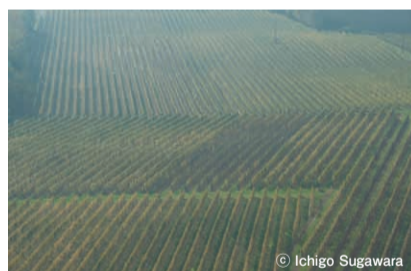
さら地になったままの集落跡など津波の傷跡が残る中を、白地に赤と青のシンボルラインを施した新型車両とレトロ調車両の記念列車が、「帰ってきたよ」と言うかのよう

また達増県知事が「壊れたものを直し、新しいものを作るピークはこれか

「いつまでも親友」とクウェート大使が手を振り笑顔で応え、笑顔と歓声の輪がさらに大きく広がりました。



記念列車に向かって笑顔で手を振る住民たち



ソルフェリーノの戦場跡/イタリア



ジュネーブへの途上/フランス



晩年の地ハイデン/スイス



ソルフェリーノの戦場跡/イタリア



全線での運行再開を喜び合う藤原さんと三陸鉄道の望月社長(4月6日、宮古駅)



復興への希望を乗せて走る記念列車を多くの住民が出迎えました

備などに活用されました。こうした支援などもあり、これまで不通になっていた区間も全面復旧を果たしました。

釜石駅ホームでは地元の人々の女性グループが列車を出迎える姿も。「三鉄が開通してうれしいです。これからいっぱい乗ります。全国の皆さんにもいつばい来てもらいたい。いっぱい乗ってほしい」「クウェートの支援に感謝、感謝です。世界は一つだということを実感しました」と笑顔をほころばせていました。

釜石駅で行われた全線運行再開記念式典では、三陸鉄道の望月正彦社長が国内外からの支援に感謝しながら、「三陸鉄道はこれから生活の足としての役割を果たすとともに、全国から大勢のお客様を迎えて産業振興や地域の活性化に貢献することを誓います」と運行再開を宣言。

停車する駅ごとに虎舞や大太鼓などの郷土芸能を披露し、ホタテやワカメなど自慢の海産物を使った郷土料理を乗客に振る舞います。各駅のホームに埋める住民の笑顔にアル・オタイビ大使や藤原さんが目を細く、笑顔と歓声の輪がさらに大きく広がりました。

「いつまでも親友」とクウェート大使

翌6日、宮古市で行われた北リアス線の運行再開式典でアル・オタイビ大使は「三陸鉄道がこの地域の社会と人々に新たな息吹を吹き込んでいくように見えます。私の国の国民も政府も日本の皆さんへの支援を続けていきます。私たちのことをいつまでも一緒にいることを約束した親友だと思っていてください」と被災地への厚い友情をあらためて示しました。

「赤十字への道」菅原一剛著 赤十字の源流をさぐる写真の旅



5月8日発売(予定)
発行・お問い合わせ: euphoria FACTORY
(03-6802-5243)
発売: 講談社エディトリアル 定価: 4000円(税込)

世界最大の人道ネットワークである赤十字。その生みの親、アンリー・デュナンの足跡をたどった写真集です。19世紀当時の面影を色濃く残すヨーロッパの風景の中、赤十字発祥のゆかりの場所や建物

が、情緒的な美しさをもって写し出されています。著者の菅原一剛氏は、日本赤十字社の契約カメラマンとして国内外の赤十字支援活動の現場や東日本大震災の被災地で撮影を行ってきた写真

家。一昨年と昨年の2回にわたり、デュナンが赤十字思想の着想を得たイタリア・ソルフェリーノ、最初の赤十字組織が生まれたスイス・ジュネーブ、デュナンが晩年を過ごしたハイデンなどを取材してきました。

写真展開催 ~写真集「赤十字への道」から

日時 平成26年5月8日(木)~30日(金)
場所 日本赤十字社 本社ビル1F 正面玄関ロビー(東京都港区芝大門1-1-3)

赤十字思想 原点は戦場での救護活動

1859年、フランスなどの連合軍とオーストリア軍が北イタリアのソルフェリーノで激突。その凄惨な戦場を目撃したスイス人実業家アンリー・デュナン(1828-1910)が着想した「敵味方のない救護活動」の実践こそが赤十字の原点です。デュナンはソルフェリーノの戦いから3年後の1862年に出版した『ソルフェリーノの思い出』で負傷兵の救護組織を平

時から準備することやその活動を国際法で保護することなどを提案。これを受けて国際赤十字が生まれ、1864年には戦時国際法のジュネーブ条約が誕生しました。今年はこの条約誕生から150年です。事業の失敗で不遇な晩年を送ったデュナンですが、1901年に第1回ノーベル平和賞を受賞しました。

常任理事会開催報告

平成26年4月18日、本社において平成26年度第1回の常任理事会が開催されました。審議結果は左記のとおりです。

記

1 規則の改正について
(日本赤十字社職員給与
要綱の一部改正)
審議の結果、規則の改正については原案のとおり議決されました。
また、赤十字原子力災害情報センターの取り組み、予算の補正にかかる社長専決事項の決定状況について、それぞれ報告しました。

上智大学と共同宣言

若者のボランティア拡大で連携

日本赤十字社と上智大学は3月19日、若者のボランティア参加を協力して広げていくことをうたった共同宣言「ボランティア・パートナーシップ・アグリーメント」に調印しました。日赤はボランティア活動の情報などを大学側に提供、上智大学は学生や卒業生、教職員に向けてボランティア活動への参加を呼びかけます。

大正2(1913)年に創立され、昨年100周年を迎えた上智大学では、キリスト教ヒューマニズムに基づき、「他者のために、他者とともに」を教育精神に掲げた人材育成を行っています。これまでも地域でのボランティアや東日本大震災の復興支援など、さまざまなボランティア活動を学生に紹介する取り組みを重ねてきました。

共同宣言の調印に臨んだ同大の滝澤正学長(当時)は「日赤の近衛忠輝社長は「ボランティア精神に基づく人道活動という原点に立ち返ることが(赤十字にとって)大切。そのためには若い人の意見や

本赤十字社と本学とは、『他者の奉仕』という共通のミッションを持つています。本日の宣言は、本学のボランティア活動の充実・発展に大きく寄与するもの。ともに行動することで、これからの日本、世界を担う若者を育てていきたい」と決意を表明しました。

日赤の近衛忠輝社長は「ボランティア精神に基づく人道活動という原点に立ち返ることが(赤十字にとって)大切。そのためには若い人の意見や

青年奉仕団とのコラボも

今回、上智大学と結んだ「ボランティア・パートナーシップ・アグリーメント」。日赤が大学と結ぶ協定としては、昨年4月の明治学院大学との共同宣言に続くものです。

今後の具体的な取り組みとしては、青年赤十字奉仕団(全国約7000人)が

考えを積極的に取り入れていく仕組みが必要であり、上智大学との協定は心強い」とパートナーシップへの期待を寄せました。

取り組みHIV/エイズ予防啓発活動などに上智大学の学生の参加を促していくとともに、上智大学が取り組むボランティア活動への青年赤十字奉仕団の協力、災害発生時の協力体制の構築などについても検討していく予定です。

子どもたちの健やかな成長や家庭について国民全体で考える「児童福祉週間(主唱：厚生労働省など、協力：日本赤十字社ほか)が、5月5日の子どもの日から1週間の日程で始まります。

児童福祉週間の取り組みは昭和22年からスタートしました。今年度は千葉県の中西愛美さん(7)の作品「そのいつば、みらいにつづくゆめのみち」を標語に、全国各地で児童福祉の理念の普及啓発を目的とした行事が催される予定です。

日赤は、さまざまな事情により親が養育できない子どもたちを預かる乳児院などの児童福祉施設を全国で16施設運営しています。その中の一つが日赤医療センター附属乳児院(東京・渋谷)です。病院と同じ敷地内にある強みを生か

児童福祉週間の取り組みは昭和22年からスタートしました。今年度は千葉県の中西愛美さん(7)の作品「そのいつば、みらいにつづくゆめのみち」を標語に、全国各地で児童福祉の理念の普及啓発を目的とした行事が催される予定です。

日赤は、さまざまな事情により親が養育できない子どもたちを預かる乳児院などの児童福祉施設を全国で16施設運営しています。その中の一つが日赤医療センター附属乳児院(東京・渋谷)です。病院と同じ敷地内にある強みを生か

し、休日・夜間を問わず適切な医療サービスを提供。重い病気や障害のある子どもたちの生活をサポートしています。

入所する子どもたちのケアだけでなく、地域の子育て支援にも力を入れているのが日赤の児童福祉施設の特徴です。徳島赤十字乳児院では毎月、地域の親子に乳児院を開放し、親子そろってのレクリエーションや保育士による育児相談などを実施。子どもたちが心身ともに健やかに育ち、明るく素敵な未来へと歩んでいくための取り組みを進めています。



上智大学の滝澤学長(当時・左)と日赤の近衛社長

児童福祉週間(5月5~11日)

子どもたちに素敵な未来を! 日赤も全力応援



施設開放イベントは地域親子の交流の場に

子どもたちの健やかな成長や家庭について国民全体で考える「児童福祉週間(主唱：厚生労働省など、協力：日本赤十字社ほか)が、5月5日の子どもの日から1週間の日程で始まります。

児童福祉週間の取り組みは昭和22年からスタートしました。今年度は千葉県の中西愛美さん(7)の作品「そのいつば、みらいにつづくゆめのみち」を標語に、全国各地で児童福祉の理念の普及啓発を目的とした行事が催される予定です。

日赤は、さまざまな事情により親が養育できない子どもたちを預かる乳児院などの児童福祉施設を全国で16施設運営しています。その中の一つが日赤医療センター附属乳児院(東京・渋谷)です。病院と同じ敷地内にある強みを生か

し、休日・夜間を問わず適切な医療サービスを提供。重い病気や障害のある子どもたちの生活をサポートしています。

入所する子どもたちのケアだけでなく、地域の子育て支援にも力を入れているのが日赤の児童福祉施設の特徴です。徳島赤十字乳児院では毎月、地域の親子に乳児院を開放し、親子そろってのレクリエーションや保育士による育児相談などを実施。子どもたちが心身ともに健やかに育ち、明るく素敵な未来へと歩んでいくための取り組みを進めています。

昭憲皇太后基金

世界の人道活動を見守り続けた100年 国際シンポジウムで先駆性などを評価

昭憲皇太后基金の100年余りに及ぶ歴史を振り返る国際シンポジウム「日本発 100年続く国際人道支援」明治の皇后「昭憲皇太后基金」と赤十字」が4月6日、高円宮妃殿下御臨席の下、東京・渋谷の国連大学で開催され、52カ国の駐日大使・公使を含む360人が参加しました。

同シンポジウムは、明治神宮国際神道文化研究所が主催し、日本赤十字社などが後援したものです。

基調講演に立った日赤の近衛忠輝社長は、政府開発援助(ODA)ではカバーできない

い分野の事業を昭憲皇太后基金がサポートしてきたことや、同基金の配分には資金の拠出国である日本が一切口出しをせず、純粋な人道支援として続けられてきたことなどを説明。「こうした基金の存在を広く国民に知って欲しい」と訴えました。

同じく基調講演を行ったICRCのフランソワ・ブニョン最高統治機関委員は、ヨーロッパにおいても貧困や疾病に苦しんでいた20世紀初頭にあって「昭憲皇太后基金は赤十字の平時活動を促進する契機となり、災害や疾病などに苦しむ何百万もの人々がその恩恵を受けてきた」と感謝の意を表明しました。

幅広い人道支援活動をサポート

パネルディスカッションではICRCのマーティン・ファラー東アジア地域代表が、昭憲皇太后基金による支援申し込みが2012年に35件、2013年には26件あったことを紹介。「ICRCとIFRCの合同委員会では、申し込みのあった各国の事業が人々のいのちを救い、またそのための行動変容につながるかを注意深く検討した上で、配分先を決定している」と述べました。

明治神宮国際神道文化研究所の今泉宜子主任研究員は、昨年基金の配分を受けたベラルーシ赤十字社の事業「障がいのある子どもと家族のためのサマーキャンプ」などの取材体験に基づき、基金が開発途上国の保健衛生や災害対策、青少年事業など幅広い人道活動を支えている実情について報告しました。



パネルディスカッションには、元国連大使の大島賢三氏も参加しました

第93回昭憲皇太后基金支援事業 中南米など6カ国に1214万円の配分を決定

開発援助の国際協力基金では世界的先駆けとして知られる「昭憲皇太后基金」の第93回配分先が4月11日、赤十字国際委員会(ICRC)と国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)で構成する昭憲皇太后基金管理合同委員会から発表されました。

今年はチリ赤十字社など6カ国の赤十字社・赤新月社が取り組む事業に対し、総額1214万円が配分されます。

基金は、明治45(1912)年に明治天皇の皇后であった昭憲皇太后が「平時事業のために」と国際赤十字に寄付した10万円(現在の価値で約3億5000万円相当)を基に創設されたもの。今回の配分により、配分地域は159の国と地域に広がり、配分総額は14億6322万円になりました。



ホンジュラスは国民の7割が30歳以下の若者。貧困や不平等を背景に青少年の犯罪が大きな社会問題になっています

- ### 第93回の配分先と対象事業の内容
- ①チリ赤十字社(中南米)・・・約126万円
障がい者の社会参加推進を図るため、障がい者自身のスキルや知識の向上を目指した取り組みを実施
 - ②ホンジュラス赤十字社(中南米)・・・約150万円
犯罪や違法行為に関わる若者を減らすため、青少年を対象にした教育プログラムを実施
 - ③コモロ赤新月社(アフリカ)・・・約222万円
コモロ赤新月社に集う青少年ボランティアを対象に研修会を実施し、ユースリーダーを育成
 - ④エジプト赤新月社(中東)・・・約231万円
救急法受講者のボランティアに手話を指導し、聴覚障がい者らが救急法を学べる体制を構築
 - ⑤セルビア赤十字社(ヨーロッパ)・・・約230万円
子どもたちの人身売買被害を防ぐため、幼稚園や小中学校で啓蒙活動を行うボランティア指導者を育成
 - ⑥アイルランド赤十字社(ヨーロッパ)・・・約254万円
受刑者ボランティアによる受刑者への救急法の講習を拡大するための活動を展開

赤十字をもっと知って

5月は赤十字運動月間

あなたも赤十字サポーターに!

日本赤十字社は、「苦しんでいる人を救いたい」という理念の下、災害時の救護活動やいのちを守る救急法の普及など、国内外でさまざまな人道支援活動を行っています。こうした活動を支えているのは、赤十字社員をはじめ、皆さまから寄せられる活動資金です。5月は赤十字運動月間。人間のいのちと健康、尊厳を守る活動のため、皆さまの赤十字社員への参加や寄付へのご協力を心よりお願いいたします。



愛の力を信じている。

活動資金にご協力ください。平成26年度運動月間広報ポスター

OPEN 赤十字運動月間特設サイト <http://www.jrc-undougekkan.jp>

ご協力をお願いいたします

日赤では、赤十字社員となって活動を支援していただくほか、ご寄付も随時受け付けています。詳しくは、日赤ホームページ (<http://www.jrc.or.jp/contribute/index.html>) または、ナビダイヤル (0570-009595) でご案内しています。

赤十字社員になっていただくには

インターネットで* インターネットから日赤ホームページからお申し込みください。クレジット決済でその場でお手続きが完了。https://donate.jrc.or.jp/jrc/application/registerEmail

口座振替で* 日赤ホームページから「社員加入申込書」を印刷し、必要事項を記入してご郵送ください。

戸別訪問で 赤十字奉仕団や町内会の方々がお配りする申込用紙にお金を添えてお申し込みください。お近くの窓口で 日赤の各都道府県支部、各市町村の赤十字窓口では、その場でお申し込みを受け付け中です。

*クレジット決済、口座振替の場合、振込手数料や事務手続き費用を日赤が負担させていただいたため、1回当たりの金額は2000円以上でお願いしています。

ご寄付いただくには

インターネットで* 日赤ホームページ上からクレジットカードで簡単にお手続きができます。

銀行振込/郵便口座で 窓口へ備えつけの振込用紙、振替用紙に必要事項を記入してお振り込みください。

コンビニで ファミリーマートの情報端末「Famiポート」からタッチパネルで簡単に。

ポイント募金などで クレジットカードなどのポイントを利用できます。募金サイトでのクリック募金も受け付け中。

災害や紛争での救護活動

国内外の大規模災害や紛争地での救護活動、将来に備えた救護員養成、救援物資備蓄などに



救急法などの講習

もしものときに役立つ救急法をはじめ、水の事故や子どもの事故防止のための講習会などを開催

日本で、世界で

活動資金は今日も役立てられています



地域福祉・青少年活動

地域福祉を担う赤十字奉仕団のボランティア活動を支援するほか、青少年赤十字(JRC)を育成

国際的な人道支援や開発援助

政府の援助が届かない分野で、開発途上国の災害復興支援や保健衛生指導をサポート



*血液事業、医療事業、社会福祉事業はそれぞれ独立した特別会計の下、運営されています。

ご存じですか? 日赤のこと

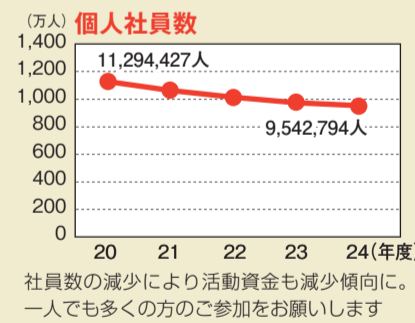
あなたの素朴な疑問に答えます

日赤が国の組織じゃないって本当?

本当です! 税金で賄われている組織と思っている方も少なくありませんが、実は「日本赤十字社法」という法律に基づいて設置された民間の組織なのです。その活動に税金は使われておらず、赤十字の理念や活動に賛同いただいた皆さまから寄せられる活動資金によって支えられています。

誰でも赤十字社員になれる?

その通りです! 赤十字の理念と活動に賛同し、年額500円以上の資金協力を継続していただく方を赤十字社員と呼んでいます。日赤で働く人という意味ではありません。国籍や年齢、個人・法人を問わず、どなたでも赤十字社員になることができます。



病院や献血は知っているけど、日赤って何をしている組織なの?

国内外での幅広い人道支援活動が日赤の任務です。全国47都道府県に支部があり、世界189の国と地域に広がる赤十字ネットワークの一員として、災害時の救護活動や救援物資の配布、紛争地での医療支援、途上国への保健衛生支援などを展開しています。また国内では、社会福祉施設の運営、救急法などの講習、赤十字ボランティアによる地域での活動なども行っています。

日赤の活動って取っ付きにくい印象があるけど、私も参加できる?

もちろんです! 皆さまの身近なところで活動しています。例えば、AED(自動体外式除細動器)の使い方やもしものときの応急手当を学べる救急法などの講習は各都道府県支部で定期的に開かれていて、どなたでも参加できます。各地域や大学などの赤十字奉仕団(ボランティア)には、全国で約220万人の方が参加していて、いつでもメンバーを募集しています。

災害への備えも大切な任務です

大雨や台風災害の増加に加え、次の巨大地震にいつ襲われても不思議ではない日本列島。誰もが「被災者」になる危険と隣り合わせに生活しています。そうした事態に備えて日赤では、医療救護活動にあたる救護班を組織し、迅速に行動できるよう訓練を重ねています。また、全国の支部で救援物資を備蓄。皆さまから寄せられた活動資金は救護班の派遣や救援物資の配備などにも活用されています。



緊急セット: 携帯ラジオ、懐中電灯、歯ブラシ、電卓、ブックレット、災害時の注意書など



被災者に配布する救援物資。手布や安眠セット、緊急セットなどを備蓄しています

Check!

1 EXILE ATSUSHIさんも登場—TVCM

災害救護活動をテーマに「愛の力を信じている。」という力強いメッセージが映し出される今年のTVCMや広報ポスター。CMにはテーマソングを歌うEXILEのATSUSHIさんも登場します。



CM映像は、日赤公式YouTubeで公開中

2 表参道を赤十字でデコレーション

東京・原宿の表参道では今年も5月5日から18日まで、通りを赤十字旗で彩るキャンペーンが展開されます。



原宿のアストロビジョンではCMのスポット放映も実施

3

もうすぐ誕生!



日本赤十字社公式キャラクター

木材で院内を癒し空間に 25mの廊下にヒノキの壁



長野県

木育全国生産協議会の行う助成事業の対象施設に選定された長野赤十字病院で、3月中旬、ヒノキ、スギ材を使用した室内環境木質化工事が行われました。



スギ床マットはおしりが冷たくならないので、子どもたちも安心して遊べます

長野県産材の利用推進の一環として行われた今回の工事。北口玄関からのびる約25メートルの廊下には「ヒノキの木壁」が施され、ほんのりとヒノキの香りが漂います。小児病棟では廊下の壁面全体に「木壁」を施したほか、プレイルーム(約30㎡)の床を「スギ床マット」に貼り替え、木製ミニチュアハウスやおもちゃ箱付き本棚を設置しました。患者さんたちからは「木の香りがよい」「何とも言えない安心感がある」「カーペットよりも暖かさを感じる」など好評を博しています。

静岡で初のEPA看護師誕生 フィリピン研修生2人が合格



静岡県

日本とフィリピンの経済連携協定(EPA)で来日し、浜松赤十字病院で看護助手をしながら日本の看護師資格を目指していたモントヤ・クリスティーン・ジョイ・アルシアガさん(28)とアブリオール・ルビー・ピンク・モイセスさん(29)の2人が3月25日、看護師国家試験に合格しました。



先輩看護師と合格を喜ぶクリスティーンさん(右から2人目)とルビーさん(左)

EPAに基づく看護師試験の合格は静岡県内では初めてのことで、平成23年から同院で学びはじめた2人は、午前中に入院患者のベッドメイキングや食事の介助を行いながら、毎日8時間以上勉強。期限となる3年目に、合格率10.4%の難関を突破しました。共に「母国の家庭に仕送りを続けながら、日本の医療技術を学び、スキルアップしていきたい」と抱負を語っています。

“想定外”を“想定内”に 災害への備えを学習



秋田県

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学の「平成25年度公開講座」が3月15日に秋田市内で開催され、石巻赤十字病院の金愛子副院長兼看護部長が「3.11を忘れない」と題して講演を行いました。



参加した高校生は「看護について改めて考えさせられた。自分も目指したい」と感想

市民や医療・福祉関係者、高校生など約130人が参加した今年の講座。金副院長は、宮城県沖地震を想定したさまざまな準備や大規模災害訓練が東日本大震災で役立ったことなどを講演。また、石巻赤十字病院での院外支援活動を体験した3人の教員が体験発表を行いました。受講者からは「いつ起こるか分からない災害に備え、“想定外”を“想定内”にしていく準備が大切だと分かった」などの感想が寄せられました。

日赤岩手乳児院に新院舎 きめ細かな保育へ期待



岩手県

日赤岩手乳児院の新院舎が2月に完成。3月8日に落成記念祝賀会が盛岡市内のホテルで開催されました。



外観はシンプルで清潔感のある白を基調に

新しくなった乳児院は、子どもたち4~6人のグループごとに担当職員がつく「小規模グループケア」に対応しているのが特徴です。よりきめ細かな関わりで、子どもたちの豊かな心を育む効果が期待されています。また建物の床を木目調のクッションにしたり、キッチンや洗濯スペースが見えるレイアウトで「暮らし」感を出したり、子どもたちが安全に安心して暮らせるような工夫が各所にされています。祝賀会では、地元紫波町の「紫波ひめ隊」による餅つきや、ユネスコ無形文化遺産でもある「早池峰神楽」の舞が披露されました。

安心な空の旅を守る「赤十字 FIRST AIDER」 客室乗務員が救急法資格を取得



東京都



赤十字救急法救急員の証を胸に大空へ飛び立ちます

今年6月から就航する「春秋航空日本」の客室乗務員19人が「赤十字 FIRST AIDER」バッジを着けて乗務を行います。

現在、春秋航空日本の客室乗務員は47人。このうち19人が成田赤十字病院(千葉県)と東京都支部で救急法の講習を受講し、赤十字救急法救急員の資格を取得。残りの乗務員も同資格の取得を目指しています。また、同社の他部門の社員からも受講希望の声が挙がっているといえます。

国内、海外の他の航空会社でも、救急法の教育を受けている乗務員は少なくありませんが、「赤十字 FIRST AIDER」のバッジを着用して客室乗務員が乗務するのは春秋航空日本が初めてです。バッジは機内での安全性を考慮し、裏面をピンではなくキャッチにした特別仕様。客室乗務員の皆さんは「機内で体調が悪くなるお客様は少なくありません。皆さまに安心して空の旅を楽しんでいただきたいの思いから、赤十字救急法救急員の資格を取得しました。赤十字のバッジがお客様の不安を和らげてくれれば嬉しいです」と笑顔で話しています。

※バッジは東京都支部のオリジナル。一般の救急法資格取得者への配布予定はありません。

高校生と学生が福祉体験 健康生活支援講習を受講



大分県

大分県支部は3月27、28日に「高校生・学生対象赤十字健康生活支援講習会」を開催しました。夏休みと春休みを利用して年2回行われている講習会で、今回は看護や介護、ボランティアに関心を持つ県下の高校生と専門学校生14人が参加しました。



参加者自ら高齢者役になり、介助する側、される側両方の立場を体験

受講者は、高齢者に起こりやすい事故の予防や事故が起きたときの手当、車椅子での移動方法などについて学習。レクリエーションの方法やリラクゼーション技術、癒しのハンドケアなどの実技を体験しました。リハビリテーションの専門学校に通う学生からは「実習に向けてよい勉強になった。この経験を生かしていきたい」との声が聞かれました。

自分たちが立ち上がろう！ 高校生が献血推進活動



徳島県

徳島県の青少年赤十字(JRC)高校生メンバー52人が、3月22日に徳島駅前前で献血への協力を呼びかけました。メンバーは昨年秋、若年層の献血離れが深刻化していることなどを学習。「同世代の人に献血の大切さを知ってもらいたい」と今回の呼びかけを企画したものです。



この活動により前週より10人以上も献血協力者が増加しました

「輸血を必要としている人がいます。献血にご協力ください」とメンバーが呼びかけると、「献血場所はどこですか?」「久しぶりに行ってみようか!」と献血ルームに足を運ぶ子ども連れの夫婦や若い女性の姿も。「協力者が帰りに『献血してきたよ』と報告してくれて、とってもうれしかった」と参加メンバーは成果を確かめ合いました。

災害看護のグローバルリーダーを養成

日赤看護大など5大学院が 共同教育課程を開講

災害看護学のグローバルリーダーを養成する日本初の大学院共同教育課程として「共同災害看護学専攻」(5年制博士課程)が4月5日に開講し、高知県立大学で開講式が行われました。

共同教育課程は、高知県立大学、兵庫県立大学、東京医科歯科大学、千葉大学、日本赤十字看護大学の5大学院が連携。歴史が浅く専門家も少ない災害看護学ですが、各大学による共同教育を行うことで教員の偏りなどをカバーし、学ぶ専門領域を広げていくのが特徴です。今年は大卒から計11人が履修。5年間の履修を通じて、災害時に発生するさまざまな課題に的確に対応できる、国際性を持った看護リーダーとなることを目指します。

開講式では日本赤十字看護大学の高田早苗学長が、赤十字による災害救護活動の課題として「他との連携」を指摘されていることなどを紹介した上で「この教育課程に私どもが加わることは、赤十字にとっても、赤十字看護大学にとっても重要な意味がある」とあいさつ。日本赤十字看護大大学院1年の池田稔子さんが学生代表として「災害時に人々の健康、安全を守る役割を果たせる人材になります」と宣誓しました。



離れた場所に位置する5つの大学での共同課程となるため、講義はテレビ会議システムなどを活用して行われます

チビッ子190人がお仕事体験 赤十字キッズタウン開催

茨城県

子どもたちに赤十字のさまざまな仕事を体験してもらうイベント「赤十字キッズタウン」が、3月9日に茨城県水戸市にあるイオンモール水戸内原で開催されました。



敬礼! 出動命令を受けるチビッ子救護隊

茨城県では初開催の赤十字キッズタウン。延べ190人の子どもたちが、災害救護や病院、献血、保育士の4つの仕事を体験しました。災害救護では救護服に着替えた子どもたちが無線を使って本部と連絡。病院コーナーでは聴診器で患者さんの診察や、包帯を使った手当にも挑戦しました。保育士になった子どもは、人形を使ってのおむつ交換や、ほ乳瓶での授乳、沐浴などに大奮闘。子どもたちからは「包帯を巻くのは難しかったけど、心臓の音を聴くのが楽しかった。またやりたい」といった元気な感想が出されました。

復興応援写真展 桜メッセージツリーも満開に

岩手県

岩手県支部は、東日本大震災で被災した沿岸地の皆さんの笑顔と声を発信していくための写真展を3月7日から14日までイオン盛岡南で開催しました。



桜のツリーは5月24日からイオンスーパーセンター釜石店に飾られる予定です

被災者から寄せられた「支援への感謝は、忘れたことはありません。皆さまの愛に支えられ一日一日を大切に生きています」といったメッセージとともに、42点の写真を展示しました。来場者の中には「自分は何が出来るのかと震災以来葛藤してきました。みんなの思いが一つひとつ形になって、復興が早く進むといいです」と涙ぐむ女性の姿もありました。

会場では、来場者が被災者への応援メッセージを書き込んだ桜の花の形のカードがツリーに飾り付けられ、満開の花びらを咲かせました。

解散した奉仕団が復活! 防災などの活動に期待

兵庫県

兵庫県西部にある太子町で、3月3日に再結成された太子町赤十字奉仕団の結団式が開かれました。



奉仕団旗を手に気合いの入る上森委員長

同奉仕団は昨年3月、太子町婦人会の解散に伴い、一旦は解散。しかし、防災活動を展開していたボランティア団体を中心に再結成が話し合わせ、団員47人で再スタートすることになりました。結団式で上森俊正委員長は「防災ボランティアとしての活動が今回の結成につながった。『和のまち太子』*の奉仕団として、皆で協力し合い頑張りましょう」と決意表明。太子町の北川嘉明町長は「奉仕団の協力で、太子町が災害の少ない安全・安心の町になるよう、願っています」と新しい団への期待を述べました。

*住民一人ひとりが連携してまちづくりを進めていく町の基本目標

国際理解・親善のつどい 文化の多様性など学習

佐賀県

青少年赤十字(JRC)の高校生メンバーが体験を通じて異文化などを学ぶ「国際理解・親善のつどい」が、3月9日に佐野常民記念館で開催されました。



協議会会長の鶴丸聖人さん(18)は「世界にはいろいろな人、考え方の違いがあることを学べました」

つどいは、JRCの実践目標の一つ「国際理解・親善」のために、佐賀県JRC高校メンバー協議会が企画・運営した国際交流イベントです。3回目となる今年は、JRC加盟高校から過去最高となる約70人が参加。エジプト、ベトナム、メキシコ出身の佐賀県在住外国人の3人を招き、一緒に食事をしたり、その国の文化や言葉をスライドで学びました。また、昨年フィリピン中部台風災害で救護活動を行った熊本県支部の赤十字職員が被災直後の現地の様子や赤十字の国際活動などを講演しました。

Voice & プレゼント

Voice 本紙に寄せられた読者の声をご紹介します!

参加してみたいノルディックウォーキング

—匿名希望(神奈川県厚木市)

健康で長生きできるようウォーキングイベントのボランティアに参加しはじめてから、運動に加えて栄養と休養の大切さを実感しています。ノルディックウォーキング(2月号)や栄養教室が近くで開催されたらぜひ参加したいと思いました。

実生活に役立つ講習です

—ペンネーム 海ブドウさん(静岡県榛原郡吉田町)

奉仕団の活動を通じて年数回、救急法などを教えていただいています。身のまわりにあるタオルや毛布などを使う健康生活支援講習は実生活にも役立ちますし、介護生活にも心強い技術です。一人でも多くの人たちに知って欲しいと思います。

プレゼント

三陸鉄道 全線運行再開記念カレンダー(2014年4月~2015年3月)を3名様にプレゼントします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールにてご応募ください。

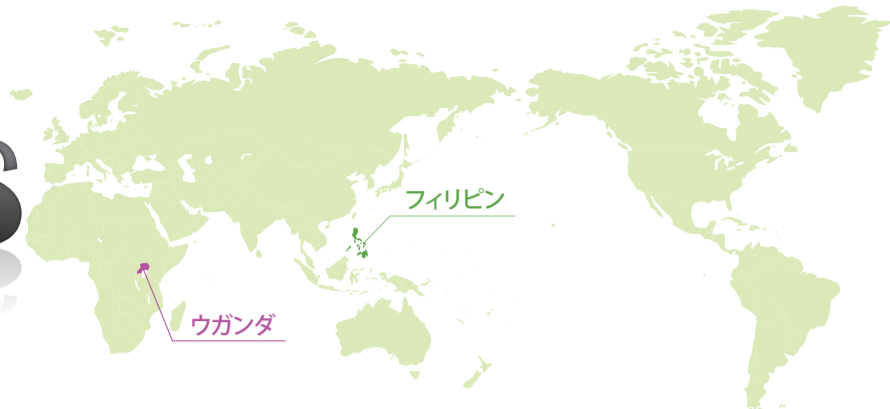


- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字NEWS5月号を手にされた場所(例/献血ルーム)
- ⑥赤十字NEWSへのご意見・ご感想や、扱ってほしいテーマなど

応募先 ● 郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 企画広報室 赤十字NEWS5月号プレゼント係
FAX/03-3432-5507
メール/koho@jrc.or.jp(件名「赤十字NEWS5月号プレゼント係」)

応募締切 ● 5月26日(月)必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

WORLD NEWS



ウガンダ

5年目に入った母子保健事業 地域住民の意識を変える 保健ボランティアの活躍

「お母さんと赤ちゃんのいのちを守るため保健所で出産しよう」—赤十字の地域保健ボランティアによるこうした教育・広報活動が、ウガンダ北部で多くの妊婦や赤ちゃんのいのちを救っています。ボランティアを育成し、その活動を促進しているのは日本赤十字社が2010年から取り組むウガンダ母子保健事業です。1年余りにわたり現地駐在員を務めた平田こずえ看護師(和歌山医療センター)がこのほど帰国。事業内容と成果を報告しました。

豊かな緑と多くの湖を抱え、「アフリカの真珠」とも称されるウガンダ共和国。著しい経済発展も遂げつつあります。しかし産婆による自宅出産の習慣が残る地域も多く、妊産婦死亡率は日本の110倍。また貧富の格差も激しく、特に20年以上にわたる内

戦に苦しんできた北部地域では、妊産婦の死亡割合が10万人中610人(2010年)とウガンダ全体の倍近くに達するなど医療サービスの立ち遅れが目立っていました。

「医療施設が少ない上に、女性の立場が弱い事もあって、妊婦が保健所に行くことがなかなかできません。多くの妊婦は自宅で出産せざるを得ず、出産時の死亡事故につながっていたのです」と平田さんは説明します。

こうした環境の改善を図るのが母子保健事業の目的です。北部アチョリ地域を対象に、各村を担当する保健ボランティア80人を育成。妊婦の家庭訪問や地域住民との対話集会を通じて、保健所での産前健診・出産を促します。また、産前健診を4回受けた妊婦さんに対しては、出産時に必要な衛生キットが入った「ママバッグ」をプレゼント。健診の動機付けにするとともに、安全な出産に役立ててもらっています。

ボランティアによる地域対話集会は93回実施され、3200人近くが参加(2013年)。妊産婦家庭訪問は3280回行われています



ママバッグはこれまでに約1万3000人の妊婦に配布。左が平田看護師

半数を超えた保健所出産

「ボランティアのモチベーションが非常に高い。自分たちで地域を良くしていこうという気持ちが伝わっています」。事業成功のカギを握る保健ボランティアについて平田さんはこう評価します。

ボランティアには月10日までの活動について1日あたり300円程度の手当が支給されます。しかし多くのボランティアは月10日を超えて活動。手当が出ない日でも、支給された自転車に乗って村々を回っています。

「妊婦さんたちからは『サポートに感謝します』『安心して出産できます』といった声が多く寄せられています。『妊婦さんに優しくしよう』という働きかけの結果、妻の健診に付き添う夫の姿も珍しくなくなりました」と平田さんは語ります。

事業開始前の2009年、北部地域で

は自宅出産が70%を占めていましたが、2011年には47.4%にまで減少。さらに支援地では92%の妊婦が医療施設で産前健診を受けるようになりました。

生活全体の底上げを

しかし、課題も残っています。日赤の支援は2015年までの予定ですが、それ以降、ボランティアの手当やママバッグ配布への財政支援がなくなった下で、母子保健の取り組みが継続できるのか。苦しい生活の中に埋没してしまうのではという不安です。

「農業や畜産の技術指導を行う他の赤十字社などの支援も行われていますが、人々の生活全体を改善するこうした支援を組み合わせていくことが、保健事業を地域に根づかせる上でも大切だと感じています」と平田さんは指摘しています。

フィリピン台風30号

日赤が約13億円規模の復興支援計画策定 住宅や公共施設再建を支援

昨年11月にフィリピン中部の各島を襲った台風30号は死者・行方不明者7806人、総被災者1,600万人に上る甚大な被害をもたらしました。日本赤十字社は救援物資の提供や医療チームの派遣など緊急救援を行ってまいりましたが、このほど被災地の復興に向けたプログラムを策定しました。

国際赤十字は今年2月、総額200億円規模の復興支援計画を策定。日赤の取り組みは、この国際的な支援と連動して実施され

ます。台風で損壊した住宅・施設を再建するとともに、健康で災害に強い地域づくりと地域の長期的な発展に配慮した復興支援を行います。

具体的には、セブ島北部地域の500世帯を対象にした住居再建・復旧、公共施設の修復、生計支援など。また国際赤十字の復興支援事業にも協力していく予定です。

こうした活動には、皆さまから寄せられた約17億円の救援金が充てられます。

日赤による支援計画(約17億円の内訳)

支援項目	内容	支援金額
セブ島北部での総合復興支援事業	住宅・公共施設の再建、給水・衛生施設修復、生計支援、保健衛生教育など	4億5600万円
サマール島での復興支援事業	赤十字国際委員会(ICRC)が実施する住宅・生活再建支援、生活環境整備事業などへの協力	2億3000万円
レイテ島などの公共施設修復支援	公共サービスの復旧を図るため、病院、学校、庁舎などを再建・修復	2億円
被災者の生活再建支援	国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)による被災者への生活再建事業を支援	1億4200万円
フィリピン赤十字社の災害対応能力強化支援	今後の災害に備えたフィリピン赤十字社の災害対応能力強化	5100万円
フィリピン中部地震被災者支援	2013年10月のボホール島地震による被災者への住宅再建などIFRCの取り組みを支援	5700万円
その他の事業(策定中)		1億円
事業評価、報告書作成、人件費など		1億300万円
緊急救援(実施済)	災害発生直後の医療チーム派遣、救援物資支援など	3億7700万円

*計画は平成26年度から30年度を予定。支援には日赤へ寄せられた救援金を活用。金額は100万円未満を切り捨て

IPCC総会

気候変動の人的影響に 赤十字も懸念

「国連気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)は3月、横浜市内で第38回総会を開催。温暖化による社会経済や生態系への影響と適応策についての報告書を発表しました。報告書は、洪水や干ばつ、沿岸部の浸食など広範囲かつ深刻な災害の増加を警告しているのが特徴です。

「温室効果ガスの排出量が現在のレベルで継続すれば取り返しのつかないことになる」と指摘するのは報告書の執筆に加わった赤十字・赤新月気候センター*のマーテン・ヴァン・アルスト氏です。「気候変動の影響は台風など一過性の災害だけではない。雨期と乾期のサイクルの変化に伝統的な農耕では対応できず、途上国では洪水による感染症拡大も懸念される。気候変動で一番影響を受けるのは最も脆弱な立場の人たちだ」と警鐘を鳴らします。

温暖化に伴う災害への対策は、これまでも赤十字による人道支援が行われてきた分野です。国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)が

2009年に策定した「2020年に向けての戦略」の中でも、気候変動への関心を高め、防災を含めた災害対応能力の強化、脆弱な地域での被害軽減などの対策を強化していくことがうたわれています。すでに、気候変動による健康被害防止へ向け、健康教育の普及などの取り組みが各地でスタートしています。今後、アジア大洋州地域をはじめ、アフリカや南米各地で「災害に強い地域づくり」などを目指す支援策にも取り組んでいく予定です。

*気候変動にかかる理論を赤十字活動の実践につなげることを目的にオランダ赤十字社内に設置されています。



横浜市内で開かれた総会では報告書の一文一文を確認。連日深夜まで議論が続きました